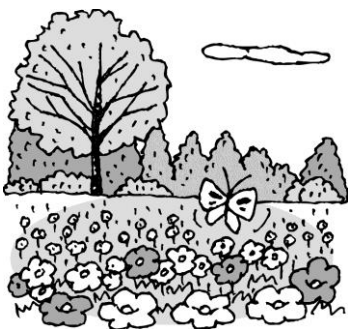


五月のテーマ
人生の岐路

飽きず 転職

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一～一九九九）のこぼれ話を掲載します。



え・小島サエキチ

カ

レーライスとカツライスだ
けをいつも昼食に出してい
る洋食屋があった。この店のメニ
ューはこれだけだった。学生のN
君は、この二つを交互に食べてき
たが、いつも同じでつまらない、
とうとう飽きてしまった。

「こうなったら、自分で何か作る
しかない」。N君はそう結論づけて、
その年の二月、親しくしているそ
の店の調理場に入らせてもらい、
自己流の料理を作ってみた。

皿盛りのご飯を井に移し、その
上にカツライス用のカツをのせ、
メリケン粉をとりてソースを煮つ
めた汁をかけた。そして青エンド
ウを上にあしらってみた。食べて
みると、なかなかいける。

「こりや、なんというのか、うま
いぞ」とまわりからいわれ、N君
は、「うーん、そうだな、カツ丼だ」と
即座に答えたのだが、この「カ
ツ丼」は大当たりで、たちまち銀
座や日本橋の食堂でも作る店が続
出し、ほどなく大阪にも広がった
そうである。カレーライスととも
に、もつともポピュラーな国民食

となつてゐるカツ丼は、一九二一
年にこうして生まれ出たのであつ
た（『早稲田大学史』による）。

ここで注目したのは、従来の
カツライスに飽き飽きしたとき、
新しいカツ料理が作られたという
ことだ。同じものを見たり、聞い
たり、食べたり、いろいろやって
いると、飽きがくる。だがそこに
こそ、その飽きを活用するか、あ
るいはそのままで過ごしてしまう
のか分かれ道があるのである。

同じようなカツライスを毎日食
べていても飽きない人があるだろ
う。あるいは飽きていても、我慢
して食べている人もあるだろう。
Nさんの場合は、飽きたのである。
何か新工夫はできないものか。そ
うした単純な考えの中に、ヒント
がひらめいたのである。

発明とか発見とか、そしてまた
広い意味においての成功などとい
うものは、こうした飽きや苦難の
中から生まれてくることが多い。
ぼんやりと飽きの中に、ただ飽い
てアクビをしているだけでは改良
改善はできない。向上もない。

職業に飽きがきたらどうするか。
「飽きずにやるのが商いだ」とい
う人もあるが、転職もひとつの道
であろう。しかし勝手に飽きっぱ
い性格ではどの職業を選んでも、
飽きがきて、次から次へとどま
ることがない。自分がやらねばな
らない今の仕事、それに飽きがき
た。どうしたらよいか。

そのときこそ進歩か、退歩か、
それとも現状維持のままか、それ
らを決する重大な分かれ道に立っ
ているのである。

もし飽きがきたら、その中に前
進の道ありと心得て、その仕事を
よく見、よく感じ直すことだ。「ア
ー、アー、また掃除か」と思うよう
だったら、そこにこそ進歩改善の
妙法ありと気持ちをかえ、気をつ
けてのぞむ。すぐにその妙法は得
られなくても、そう気分をかえた
だけでも楽しくなる。

全く同じことを続けてやる一貫
不怠の道のほかに、こうした飽き
を活用する道も厳然として存在す
るのである。

（単行本『常に活路あり』より）